

アメリカザリガニの疑問と勘違い・ 生き物とのふれあいとは

4月からひたすら湧水池のザリガニ捕りを続けてきました。ザリガニさえいなければ、もっといいビオトープ池になるはずだからです。この作業で納得したこと・勘違いだったこと・まちなかの自然とは等、私を感じたことをちょっと聞いて下さい。

その1 アメリカザリガニは、2ヶ月で増殖するか

小さな湧水池で何匹かのザリガニを見つけたのが2002年6月でした。その年の8月ははっきり「増えた」という感じ。9月には水草の茎もなくなってしまい呆然としました。捕獲したザリガニ数はその年で54匹、翌年(2003年)で47匹、捕獲数は氷山の一角、とって減るどころか増える一方という感じでした。しかし2ヶ月で産卵し次の世代が大きくなるほど成長が早いわけではなく、そう見えただけらしい。

佐藤修さんの報告や本をよく読むと、交尾から産卵まで40~90日、産卵から孵化まで2週間、孵化して8mmの稚エビになるのにさらに2週間、ここから先は急に大きくなる。孵化から1年半から2年後で繁殖可能とあります。インターネットのザリガニ飼育日記では孵化後13ヶ月で抱卵していたとある。いずれにせよ前年かそれ以前に放されたザリガニが増えてから気がついた、なのでしょう。今年は4月始めに冬眠中のザリガニを103匹、7月6日まで全部で307匹捕獲(最小は6月1日体長2cmが2匹、この春孵化した個体でないと思われるが)、最初に入れたのは何匹か、今も人による補給があるのか、わかりません。

その2 アメリカザリガニは、やわらかい水草を食べ尽くすか

これは本当です。水研クリエイトの佐藤さんの報告(みずみどり20号、ホームページにも掲載)でも写真入りで食害が紹介されています。大食なのですね。湧水池に



ザリガニが投げ込まれて消えたのがエビモ（藻）、クレソン、セリ、スイレン。藻はすぐに、クレソンとセリは茎や葉脈を残して食べられ、次に行ったときは茎もなくなっていました。ところがキショウブ、ショウブは残っています。美味しくないので、固いのか。トンボ池でもガマはなくなりましたがイグサ（豊表にする固い草）は生き残っています。固い草しか育たない水辺もさみしいものですよ。赤塚植物園ではザリガニもいるようですが、管理が行き届いていて水草も繁茂しています。が、この小さい池ではザリガニとの共存は非常にむずかしい。写真左は 2001 年 6 月で藻があります。右は 2002 年 9 月で、ショウブ以外はすっかり消えてしまいました。

その3 アメリカザリガニは共食いするか

狭いバケツの過密状態で、大きなザリガニがハサミを振り上げ、ようやく 4 cm 位の仲間 1 匹を捕まえました。捕まえた仲間のハサミを切り、脚を全部しごいて千切ってしまいました。この間 30 分位か。逃げるのは早いですが、襲い方は敏捷ではありません。しかし手足をもがれ半死のザリガニと格闘したものの食べることが出来ず、ヘトヘトになって、あきらめて放してしまいました。ザリガニは甲殻類、殻が固く小さなザリガニでも食べられないようです（脱皮時には共食いする）。

その4 オタマジャクシがいなくなったのはザリガニが食べたからか

前号にも書きましたが、今年はいじめて多数のオタマジャクシが生き残り、無事カエルになりました。私達はザリガニがオタマジャクシをおそっているところを何度か見えています。しかし赤塚トンボ池ではオタマジャクシの大敵は人間ではないかと思われました。今年は池が干上がって泥深く、全部は捕まえられなかったのです。子供達は「学校の観察の時間に必要だから」、「家で飼いたい」等々と言って網をもって柵を乗り越えて池に入ります。生き物を捕まえるのは楽しい。触る体験から生き物や命を学ぶとも言われます。しかしこの池は、何人かが生き物を持ち出せばいなくなってしまう位小さい。都会こそ子供達の遊びを許容できる広い自然の環境が必要です。でも小さな池しかなかったらどうしたらよいのか、子供達と大人と一緒に考えたいテーマです。

その5 トンボのヤゴがいなのは、ザリガニに食べられたからか

小さな池が出来た年にクロスジギンヤンマの抜け殻は 80 頭もあったのに、ザリガニが投げ込まれてからヤゴも抜け殻も見あたりません。トンボが来て産卵するのを見るたび、ヤゴが育ち、トンボが羽化する池を取り戻したいと思うのです。

「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」が 6 月から施行されました。特定外来生物に指定された生物のひとつ、話題のブラックバス（オオクチバス）も、生態系に与える影響の大きさと対策の必要性がはじめて認められたのです。

アメリカザリガニは大正時代にウシガエルのエサとして日本に持ち込まれ、既に野生化しています。外来生物ですが、法の対象外です。農薬に弱いので水田では問題になっていないようです。しかし私達の自然を取り戻す活動でわかったことは、農薬を使わない自然の池（ビオトープ）では、アメリカザリガニが在来の動植物に想像以上に大きな影響を及ぼしていることです。そして、いったん放されてしまうとその除去は非常に困難です。カメ、ザリガニに限らず飼育していた生き物を「自然に帰してあげる」つもりで近くの公園などに放すことは、自然破壊にもなるのです。

と言うと「ザリガニは有害だから捕ったほうがいいでしょ」（ザリガニが悪いわけではない）と、柵を越え池の中へ立ち入られるのも困ります。保護している水際やそこにいる小さな生き物がダメージを受けます。

ザリガニや蛙だけが生き物ではない。様々な小さな生き物たちがいっしょうけんめい生き残る工夫をしていることを子供達に教えてあげたい。赤塚公園にはそういう自然が残っており、この世界は人間だけのものではないことを教えてくれる場所です。そして同じ公園内にある大きな赤塚ため池の一部でも、子供達が小さな生き物とふれあえるビオトープにできないのかなあと思うのです（坂本 郁子）。